

信仰する上では、感動することが大切だと教えられたことがある。「おふでさき」を読んでじかに感動することもあれば、少し時間が経ってから読んだことが実地に納得されて感動するということもあるだろう。あるいは、ほかで感動されたことが後に「おふでさき」で確認されるということもあるかもしれない。当連載は、そうした信仰の歩みにおける道標・標石として「おふでさき」を読むという意図で「標石的用法」という題を付けているが、前々回からとりわけ「そうじ」という言葉に着目して、自身の信仰の上での感動を喚起しようと試みている。

「そうじ」に関して、これまで一号から八号まで見てきた。一号と二号では「やしきのそうじ」という言葉で親神から見てふさわしい人材の配置が示されつつ、また、三号ではこの道を弘める上での不必要な建物の撤去と、人々のあいだで芯となるべき人（真柱）を定めることを懸案として「心のそうじ」が促されている。つまり、「おふでさき」では、「心のそうじ」は漠然とした精神的営みとしてではなく、具体的な事柄と関連づけられ、何らかの実行を伴うものとして説かれている。

次に、三号で、そうした「心のそうじ」は神が「ほうき」となり「不思議な働きを現すこと」によって人々の心の掃除を促す旨が述べられて、さらに四号では「どのような“痛み”や“悩み”や“できもの”や、あるいは“熱”や“下痢”など、すべては「ほこり」（が元）である」と教えられている。「心のそうじ」は、身体上の痛みや事柄の上での悩みを通して自身の心の反省をする中で遂行されていき、その成果は親神の「不思議な働き」に包まれて現されていくといえよう。

続く五号では、「心のそうじ」が為された暁には、この世界を創めた働きを現す「つとめ」の手を教えていくと詠われ、また、七号においても、「心のそうじ」が陽気な「つとめ」を教える段取りの一つであることが示されており、さらに八号では「つとめ」の場の中心に据えられるべき甘露台と関連づけられて、その場の物の上からの掃除とともに「心のそうじ」の遂行が促されている。こうして「心のそうじ」は「おふでさき」のメインテーマである「つとめ」と関連づけられて説かれており、その際、七号ではそうした「心のそうじ」はとりわけそれぞれの「うち」の話だと述べられ、家内や身内といった身近な人間関係における「心のそうじ」が焦点化されている。つまり、家内の和合の努力が「つとめ」を成立させる「心のそうじ」の重要な要素の一つであるといえよう。

さて、「そうじ」という語は九・十・十一号には直接的に見られず、今回は十二号を見ていきたい。十二号では冒頭から「そふぢ」という言葉が見られる。

けふからハセかいを月日みさだめて  
むねのそふぢにかゝる事なり (十二号 1)  
このそふぢうちもせかいもへだてない  
めゑへの心みなあらわすで (十二号 2)

この冒頭二首は、「心のそうじ」に関して核心的なことを端的に述べているように思える。すなわち、そこでは「心のそうじ」に取り掛かる主体が親神であることが示され、その段取りとし

ては親神が①「世界（の心）を見定めて」、②「各々の心をすべて表す」と教えられ、その対象としては「内も世界も隔てない」と詠われている。三号では親神は「不思議を現す」ことで「心のほこり」をはらうと述べられ、四号では病の元は「心のほこり」であることを詠われていることを見たが、十二号でも同様の主旨で、親神は、人間の心のありようをより明確なかたちで顕在化させることで、人間にその自覚を促す方途を取っている。続いて7・8の歌では、「にほん」「から」「てんぢく」という言葉で、「そふぢ」をする範囲が世界中の人々にまで及ぶことが表現されており、そのことを「承知せよ」と詠われている。

このはなしなにの事をばゆうならば  
にほんもからもてんぢくの事 (十二号 7)  
これからハセかいぢううを一れつに  
月日そふぢをするでしよちせ (十二号 8)

七号では「心のそうじ」が「うち」の話として焦点化されていることを見たが、「内も世界も隔てない」とはすでに四号108でも説かれ、この十二号の冒頭でも示されている通り、「心のそうじ」は「うち」からはじまって広く世界中の人間が取り掛かるべきことであるといえよう。

また、十二号では73からの一連の歌に「そふぢ」という語が出てくる。まず、「かしの・かりもの」の教理が前提にされつつ、親神が「心のそうじ」に取り掛かれれば誰もそれに逆らうことはできない(73)、それは親神が人々の体内に入ってその心遣いを身の上や事柄の上に現すからである(74)と説かれている。そして、そのことは身分の高い者であっても同様であり(75)、何事も親神の言うことをよく考えよ(76)と諭されている。そして、親神がどのようなことと言ひ、また、どのようなことが起きても、それは世界中の人間の「心のそうじ」を果たしたいからであり、たすけたい一心からであると詠われて(77・78)、これから先に現れてくる親神の働きを確かに見ていよ、そうして「成ってくる理」の実現を見るとき、人々の「心のそうじ」はおのずから為されていく(79)のであり、「心のそうじ」がすつきりと出来たならば、そのまま直ぐに「お守り」を渡す用意に取り掛かると詠われている。

さらに、171からの一連の歌にも「そふぢ」がおのずと出来ると詠われている。すなわち、それぞれの心遣いでも身の内に確かに現し(171)、それを見たらどのような者でも心底から「心のそうじ」がおのずと出来るようになる(172)。

めへへの心みのうちどのよふな  
事でもしかとみなあらわすで (十二号 171)  
これみたらどんなものでもしんぢつに  
むねのそふぢがひとりてけるで (十二号 172)  
このたびハどんな事でもすきやかに  
あらわれだしてみなしてみせる (十二号 173)  
たいないになにがあるやらどのよふな  
ものでもしりたものわあるまい (十二号 174)  
このはなし月日のし事これをみよ  
心しだいになにをするやら (十二号 175)